

おめでとう、東京 40・松山 25！

大村 恵美子

今年は、奇しくも東京バッハ合唱団が生まれて 40 周年、また松山バッハ合唱団が 25 周年にあたり、それぞれにバッハの「ミサ曲口短調」をもって祝いました（東京 5 月 12 日、松山 5 月 25、26 日）。

松山バッハ合唱団は、東京在任中の橋本眞行様が、私たちの合唱団で歌って、バッハのすばらしさを知り、松山に帰国されてすぐ結成されたものです。その後も松山・東京間を往復されながら、東京バッハ合唱団の定期演奏会やドイツ演奏旅行などにも、熱心に参加してこられました。

松山のすばらしいところは、橋本さんの出身校である愛媛大学をはじめ、全市の役所・企業・報道機関を挙げて、この合唱団の活動をサポートしてくれることです。これは、橋本さんの人徳や、狙いを定めた行動力と、合唱団の活動実績によるもので、25 年の歩みを、心から称賛いたします。

姉妹都市であるドイツのフライブルクとの交流の、ねばりづよい努力の成果として、5 月 25 日（広島）と 26 日（松山）松山・フライブルクの両バッハ合唱団にヒロシマ・バッハ・ソロイスツが加わった「ミサ曲口短調」の合同演奏会がみごとに成し遂げられました。東京バッハ合唱団では、5 月 12 日の定期演奏会にも出演された橋本さんから、その企画を伺って、松山のイベントをお祝いすることを思い立った人々が 10 人。その内、数日前から出かけて、広島・松山の両コンサートに出演させていただいた団員は 5 人（S 片岡、A 室田、T 島津、B 片岡・室田）聴く側に参加したのも 5 人（大村恵美子・健二、山下淑子・広之、荒井せつ子）+2 人の室田家のお子さん。

ボイアーレ氏の正統的で繊細、かつ内容の深い指揮のもと、フライブルク・広島・松山 3 市のバッハ愛好家が一堂に会して、「平和の祈り」をささげたのでした。

盛大なコンサート後の打上げパーティーは、くじ引きで 20 ものテーブルを、いろいろな立場の人々が入り混じって囲み、親しく語り、杯を交わしました。この席の配置から、宴の進行の隅々に至るまで、じ

つに善意と創意に満ちあふれ、終始、自然で和やかな交歓が実現されました。

橋本さんは、「東京バッハ合唱団でのバッハとの出会いがなければ、今日までのこのような豊かな喜びはなかった」と、私たちのことを紹介してくださいました。何重にもとり巻かれた友情の環のなかから、橋本さんの松山バッハ合唱団のメンバーだけを抽出して、直接声をかけることは、この場ではできませんでしたが、謙虚な橋本さんのホスピタリティーで、フライブルクをはじめ周囲の方々への感謝が

松山市であった姉妹都市フライブルクとの交流演奏会「平和への祈りコンサート」



♪♪ 松山とフライブルク ♪♪ 交流のメロディー 荘厳に

両市のバッハ合唱団が演奏会
第三回松山・フライブルク姉妹都市交流演奏会「平和への祈りコンサート」が二十六日、松山市堀之内の市民会館であった。訪れた市民ら約千六百人が荘厳な歌と調べに耳を傾けた。
一九九五年、九八年に続く三回目のコンサートで、今回のテーマは「平和への祈り」。フライブルクバッハ合唱団が二回目の演奏会の際に広島を訪れ、原爆の痛ましさに深く心を打たれたことから公演が決まった。コンサートには松山バッハ合唱団、フライブルクバッハ合唱団とヒロシマ・バッハ・ソロイスツが出演。ハンス・ミヒャエル・ボイアーレ指揮によるバッハ管弦楽団の演奏で、バッハの最高傑作と言われる「口短調ミサ BWV 233」を約二時間間にわたって合唱。観客の感動を呼んだ。

愛媛新聞 2002 年 5 月 27 日

中心に語られていましたので、私は、ごあいさつの

なかで、特に、私たちの合唱団と、松山バッハとの結びつきに言及し、松山バッハの 25 周年を祝いに、10 人（+こども 2 人）もの人が東京からやってきたことを伝えました。

橋本さんの奥様も、お嬢様方も、総出でそれぞれ任に当たられ、彼の意志を実現すべく、一体となって動かれた松山バッハ合唱団員とそこご家族の方々の、ご熱意と行動があったればこそ、この輝かしい日が迎えられたので、特別な称賛をお伝えしたかったのです。

同席のテーブルで話題とされたいくつかのドイツ人たちとの会話から、私は 2 つのことをご披露しました。ひとつは、東京バッハ合唱団が 4 回もドイツ巡演をしたということだが、次回はいつになりますか、との問いに対して、私は、「私自身はもう十分年をとりましたので、今度は橋本さんをお願いしようと思います」と答えながら、松山・東京合同で、フライブルク、ストラズブル、ベルリンなどの巡演も考えられるかなという気が、ちらと脳裏をかすめたりしました。

また、ボイアーレ氏に、今春出版したばかりの「バッハ・カンタータ 50 曲選」の第 3 集（10 冊）をプレゼントしたのですが、それがけっこう早くもかれらの間で話題となっていたようで、ボイアーレ氏ご自身も、「すばらしい企画で、エキサイティングな驚きと喜びをおぼえます」とおっしゃいました。それについて、「フライブルクの方々から、これはどういう人々をターゲットにしているのですかと訊かれました。じつは、今日ここに来る前に、私たち 2 人は 19 日から東京を出て、京都、大阪、神戸、西宮、岡山、広島、あしたはこの松山と、各都市をまわり、主要な楽譜取扱い店で、この出版の PR をつづけてきました。これからは、日本全国を対象にして、バッハのカンタータの普及に努力してゆこうと思います」と述べました。ほとんど全曲に英訳のついているブライトコプフ社の現行楽譜を知っているかれらにとって、特に教会などで母国語で歌ったり、ドイツ語演奏の場合にも、母国語訳がどれほど役立つかということ、もう充分承知のことなのです。

それぞれの地で、それぞれに特有な利点を生かし、困難をのりこえながら、25 年、40 年と迎ってきた両合唱団にとって、これからはもっと緊密な交流が展開されるのではないかと、という期待に動かされる、夢に満ちたすばらしい日でした。



松山・フライブルク姉妹都市交流演奏会に参加して

片岡 京子（団員）

・ はじまり

私は小学校 1 年の秋から高校卒業までを松山で過ごしたのですが、その松山のご出身の橋本さんとおっしゃる方が東京バッハ合唱団におられると聞き、お会いする機会を楽しみにしていました。今年 1 月、目白での練習で初めてお会いした時、お互いの接点を探して会話を試みたのですが、ほとんど見つけることが出来ず残念に思っていました。2 度目にお会いしたのは 3 月の強化練習の時で、その時、橋本さんが主宰・指揮されている松山バッハ合唱団と松山の姉妹都市フライブルクのバッハ合唱団が、私たちと同じ「口短調ミサ曲」を、5 月末に歌うことを知り、この大曲に夢中になっていた私は思わず、一緒に歌わせて欲しいとお願いしたのです。こうして私たち夫婦は「おしかけ」ることになったのです。

お願いはしたものの、大学卒業以来 35 年も合唱に参加する機会がなく、やっと 3 年前に再開したばかり、しかも東京バッハ合唱団に入団してから 1 年という私たちは、だんだん不安になって来ました。「おしかけ」を正当化する理由をあれこれ探してみました。東京バッハ合唱団は松山バッハの兄貴分ではないか、それに、接点はないけれど年齢からいくと私は橋本さんの姉貴分ではないかと。考えて見てもこれ以上の理由は見つけれず、再度お願いの手紙を出しました。橋本さんから、「松山バッハ合唱団はお 2 人の参加を歓迎します」とお返事をいただき、私たちの気持ちも決まりました。

・ 練習

5 月 18 日（土）午後 6 時 30 分～10 時

20 時間以上かかって到着したばかりのフライブルクの団員も 8 時頃から加わる。指揮のボイアーレ氏からは容赦なく厳しい言葉が飛んできてふるえあがる。

5 月 19 日（日）午後 1 時～（1 時間半の歓迎会をはさんで）9 時まで

テノールの島津さんも東京から参加。緊張の連続で逃げ出したいほど。松山バッハ合唱団員の方たちの持ちよりディナー。練習を 9 時までした後、フライブルクバッハ合唱団員が持ってきたワインとパンで懇親会。

5 月 22 日（水）午後 6 時～10 時

オケ合わせ 1 回目。ボイアーレ氏の注意が半分オケに向いているので助かる。

5 月 23 日（木）午後 5 時 45 分～10 時

少しでも多く練習をしたいボイアーレ氏は15分開始時間を繰り上げ。今日から室田さん一家参加。

5月24日(金)午後5時45分～9時

ゲネプロ。練習の前の発声練習が独特で、身体、特に手で、目指す声を表現しながら発声することで、ヴィブラートがなく、よく響く声ができるようになり、肩もこらないことに気がつきました。また、ボイアーレ氏が強調なさったことは言葉のイントネーションで、イントネーションの強弱がそのように聞こえるように歌うということのようでした。フライブルクの人たちはレガートに歌うことが大変上手で、感心しました。

・演奏会

5月25日(土)午後6時

広島世界平和記念聖堂で演奏会。夢中で歌ったので何もおぼえていない。東京から大村健二さんが聞きに来てくださる。1列24人で6列に並んでいるので立ちっぱなし。休憩もなし。バスで松山に帰りついたのは午前1時。

5月26日(日)午後4時半

松山市民会館大ホール。「見に行くけんね」と言っていた小学校の友達数人が聞きに来てくれる。お客さんが少ないようだと言ったら、私たちはひとりの人のためにも同じように歌うと、当たり前のように言われ、本当にその通りだと感心する。大村先生、山下さんご夫妻、ソプラノ荒井さんも聞いてくださる。東京の定演を入れると3回目になり、今まででいちばん良く歌えたと思う。「見に」来てくれた友達も感激したと言ってくれた。

・出会い

今回いちばん心を打たれたのは、橋本さんを中心とする松山バッハ合唱団の方々の献身的な活躍ぶりでした。松山とフライブルクの交流は10年前から続いているそうですから、その積み重ねもあったこととは思いますが、75人ものドイツ人がまるで自分の町にいるように振舞っているのは、お互いの間に信頼関係ができていた証拠だと思います。もちろんそれ以前に、バッハの音楽をともに歌っているという大きな共通点があります。それがあったからこそ、東京から行った私たちも直ぐに友達として受け入れてくださったのですし、フライブルクの人たちとも直ぐに会話が弾みました。

私のとなりで歌っていたのはミリアム・エーゲルさんという60歳くらいの人ですが、ピアニストのケンプのお孫さんで、このフライブルクバッハ合唱団

の創設者の娘さんです。2人のお嬢さんもソプラノで歌っていました。となりで歌えて光栄に思いました。

夫のとなりで歌っていたのはハンス・ウルリッヒ・ヴェルツィーンという教授で、おくさんのウルスラさんと一緒に参加されていました。今はオ・ディションがあるけれど昔はなかったから、僕たちもこうして歌っているのだと教えてくれました。反対のとなりは、愛媛大学の教授でいずみ先生という方ですが、その先生が居酒屋で出会ったというドイツの医学生が22日の練習から参加してきました。リッキーは1995年にヴィンスバッハ少年合唱団の団員として東京に来たことがあり、それで医学部最後の学年の海外研修に日本を選んだのだそうです。そして松山に来て、居酒屋でいずみ先生に会って、歌ったことのある「口短調ミサ曲」の演奏会のことを知り、仲間になったのです。

松山バッハの中には、私たちのこどもより若い人たちがいて、新しく娘たちが出来たような気持ちになりました。また、79歳でこの大曲を立ちっぱなしで歌いとおされた方、控えめにお手伝いされていた橋本夫人、皆に励まされながら一生懸命に通訳をしていらした橋本佑貴子さん、いま手もとの顔写真を見ながら懐かしく思い出しています。

これからもっと交流が盛んになり、世界中どこくからきても、東京に来たら東京バッハの練習に参加して一緒に歌い、私たちがどこかに行けば、その地のバッハ合唱団を探して参加できるようになれば、どんなにか楽しいことでしょう。

松山で「ミサ曲口短調」を聴いて

山下 広之(団員)

2002年5月26日(日)早朝、家内と2人で我孫子の家を出て四国の松山に向かった。

橋本眞行氏が指揮する松山バッハ合唱団が創立25周年を記念して松山市の姉妹都市、ドイツのフライブルク・バッハ合唱団とその指揮者のハンス・ミヒャエル・ボイアーレ氏を招き、ヒロシマ・バッハ・ソロイストを含めてJ.S.バッハの「ミサ曲口短調」の演奏会を開くのである。前夜の5月25日(土)には広島市世界平和記念聖堂で演奏会を終えており、おそらく聖堂の深い響きの中で宗教音楽として深い感動を聴衆に与えたに違いない。そして今夜は松山市民会館大ホールという音楽会専門のホールで音楽として一層洗練された音を響かせるのではないかと期待された。

夕方演奏会場の松山市民会館に向くと、コンサ

ート20分前にもかかわらずまだ大勢の聴衆が並んで入場しつつあった。墨染めの衣を着たお坊さんも交じっており、またNHKの取材班の姿も見えて市民の関心の高さを表わしていた。

2000人を収容する大ホールにほぼ満員の聴衆が詰めかけ、熱気のうちにコンサートが始まった。指揮はボイアーレ氏。瘦身で高い背を折り曲げるようにして熱のこもった指揮ぶりだった。合唱団は女声90人、男声50人、計140人の大合唱で、半分はドイツからのメンバーだった。オーケストラのバツハ管弦楽団のコンサートマスターには、私たちの定期演奏会にも度々出演されたことのある、有名な蒲生克郷氏が座っていた。

演奏はテンポを早めにとり、大合唱でも圧力を感じさせない抑制の効いた、バツハにはふさわしい演奏で、ミサ曲の深い味わいを観客に与えていた。指揮者は時には指揮棒を振らず、祈るような姿勢で音楽を進めていた。

独唱者には岩手大から東京芸大に入りバツハカンタータクラブで活躍して今は高知大学で教鞭をとるバスの小原浄二氏の若々しい歌声もあった。また合唱団の中には東京バツハ合唱団から出演した5人の方々の顔もあった。

1時間で前半を終え、全部で2時間半の「口短調ミサ曲」を心から楽しんで聴くことができた。

会場には大村先生ご夫妻のほかにソプラノの荒井さんの元気な顔もあり、万雷の拍手の中に演奏会は大きく盛り上がり終了した。松山バツハ合唱団の今後の更なる発展を祈りたい。

第91回定期演奏会 第2報

東京バツハ合唱団第91回定期演奏会にお招きいただいて

大家 正宏

バツハの大作「ミサ曲口短調」によって行われた演奏会を聴かせていただき、ありがとうございました。

この曲は、部分的に聴いたことはあるのですが、全曲を通して、しかも生演奏で聴けましたことは貴重な経験でした。同時に、この合唱団創立40周年の記念の演奏会であることに、意義深いものを感じます。

ひとくちに40年と言っても、その間には我々には計り知れないご苦労がおりだったろうと思います。バツハの音楽作品というジャンルに絞って活動され

たことは、大村先生のご指導と、団員の皆様の団結力の結晶ではないかと考えます。また、優秀なソリストやオーケストラの方々の共演が得られましたのも、ひとえに大村先生のお人柄によるものと思います。

この合唱団の演奏は、第86回定期演奏会から毎回聴かせていただいておりますが、今回は、小口眞知子様の手になる点字のプログラムをご準備くださり、本当に感激でした。この種の点字による資料がごくわずかしかなかったため、後々までのよい解説書としても役立ちます。

バツハの晩年の作品に接する時に思いますのは、我々素人が、特にレコードのような媒体を通して耳からだけで聞いておりますと、あまりにも複雑すぎて、構成を理解するだけでも、大変だということです。そうした作品を、少しでも我々の身近なものとしていただけたところに、この合唱団の活動の意義があるように感じます。

今後の、45周年、50周年へ向かっての、ご活躍を心より願っております。

第91回定期演奏会「口短調ミサ曲」を聴いて

野村 勝時（後援会員）

「口短調ミサ曲」の演奏は、聴くたびに魂の底から揺り動かされ、その感動は筆舌に言いあらわせません。40周年記念演奏会プログラムの森井眞先生のことば、「(クレドでなく)「われ信ぜず」という不信仰者の魂をも強く揺り動かすのである」に全幅的に賛同いたします。

音楽は聴くのもよいが、演奏するほうが数倍も感動が深いようです。舞台上で楽器を演奏している人、歌っている人の顔を見ていたら ベネディクトゥスが輝き出ているようでした。聴衆の私も至福の時を共有することを許され、感謝で胸が熱くなりました。すばらしい演奏、本当にありがとうございました。大村先生と合唱団の皆様も益々の御活躍を祈ります。

東京バツハ合唱団創立40周年記念祝賀会

479号月報(5月号)ほかで、しばしば開催日を、7月2日とお知らせしましたが、

2002年7月1日(月)、目白聖公会の誤りでしたので、どうぞお間違いなく、多数の方がご参加くださいますよう、お待ち申し上げます。

月報 創立40周年記念特集号 東京バッハ合唱団

2002年7月1日発行

〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-17-21-101 Tel:03-3290-5731 Fax:03-3290-5732

E-mail:bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3Web.ne.jp/~bach/chor/

40年目の7月1日

1962年7月1日。これが、東京バッハ合唱団誕生の日です。40年後の同じ日に、創立2年目からずっと練習場に使わせていただいた目白聖公会集會場で、創立40周年記念祝会が行われます。

祝会プログラム

○団友、後援会員、団員の方々からの祝辞

○お客様の演奏

1. 箏演奏 宮崎美枝子様

(故宮崎茂様のお嬢様、東京芸術大学邦楽科大学院ご出身)

2. ソプラノ独唱 横河マリ子様

(後援会員。戦前から、リア・フォン・ヘッサート先生のご指導を受けてドイツ歌曲・バッハ等を学ばれ、今日に至るまで多数のお弟子さんを育てられた。当合唱団にも長年にわたって多方面の貢献をつづけてこられた)(ピアノ伴奏 石代佳子様)

1. フォーレ 夢のあとに

2. グノー/バッハ アヴェ・マリア

○会食(ケータリングによるサービス方式)

○全員による合唱

1. カンタータ1番より6)コラール「げに幸なるかな」
2. カンタータ196番より4)テノール・バス二重唱「主はなれをめでたまわん」
3. カンタータ78番より2)ソプラノ・アルト二重唱「急ぎゆかん 弱くともたゆまず」
4. カンタータ140番より7)コラール「グロリア 主をたたえん」

『東京バッハ合唱団40年の記録』発行

当日はまず、受付けで、まあたらしい記念誌を受けとっていただきます。

この日をめざして、『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』(1992年刊)に次ぐドキュメントを作って皆様にお頒けしようと、今回は団員ばかりの手で出版が企画構成されました。中心になったのは、山下広之(1962年入団)加藤剛男(1962年入団)松尾茂春(1977年入団)の各氏。その他、パソコンを操作できる団員数名のご協力が得られました。印刷製本の作業を除いて、他の工程は全部、団員の手でできあがったのです。鉄筆・ガリ版刷り月報第1号の昔から、40年後には、これだけの編集出版技術の革新があり、また団員内でのコンピューター普及も広まった結果

です。

内容については、手にとってお読みいただいた上で、皆様からの反響をお待ちします。お申込みがまだの方は、同封の振替用紙で、または直接のお申込みをお待ちします(送料とも¥1500円。部数は何部でもけっこうです)。

出席の方々

もう40年もたつと、これまでよく出席してくださった方々も、夜の外出は困難とか、周囲に介護を要する方々がいらしたりとかで、お気持ちはあってもご参加になれないというお知らせが多くなってきたのは、やむを得ません。そのため、あらかじめ皆様から、この日のためにお祝いのおことばをおねがいして、記念誌『40年の記録』に収録されたものが、36篇になりました。

顧問・団友：13篇

後援会員：14篇

団員：9篇

祝会にご出席予定のお客様方

[団友]

河野裕道様ご夫妻(目白聖公会司祭)

安藤能成様ご夫妻(世田谷中央教会牧師)

森井 眞 様(合唱団創立以来全面的にご指導をいただいた)

[後援会員](申込み順)

白木博也様(後援会初期からの会員。洋画家。去る4月にも丸善で個展を開かれた)

横河マリ子様(団員としても在籍された。声楽家)

宮崎恭子様(故宮崎茂氏夫人。恵泉女学園で英語を教えておられる)

宮崎美枝子様(同上ご令嬢。箏演奏家)

桜井征夫様(世田谷区議として文化政策にも尽力)

川戸龍夫様(前回定演「ミサ曲口短調」まで20年間団員でいらした)

渡辺美恵子様(第1回演奏旅行に参加。町田市で演奏活動を続けておられる)

青木道彦様(初期からの会員。あらゆる面で活発にご参加・ご協力いただき、多くの方々にご合唱団を紹介してこられた。川村学園大学教授)

石代礼子様(EMコーラス員として、早くから当合唱団と交流をもってこられた。団伴奏ピアニスト・佳子さんの

お母様)
藤田玲子様(第4回演奏旅行に参加。その後も熱心な後援会員)
野村勝時様(都立新宿高校OB「六声会」会員。母校一橋大学佐野書院にピアノを寄贈、サロンコンサートを連続開催しておられる)
宇佐見邦輔様(本年3月入会された、いちばん新しい後援会員)
稲本佑子様(初期のアルト団員。その後後援会員として、現在まで定演、懇親会などに積極的に参加されている)
中山絹子様(故中山悦朗様(バス)と一緒にアルト団員、また名会計として団を支えて来られた。悦朗様の亡くなられた後、後援会員)
高野定子様(アルト団員三上裕子様のご紹介)
伊藤貞子様(同上)

(以上、6月26日現在)

お招きする側参加者

[主宰者]

大村恵美子

[ピアニスト]

石代佳子(2002年5月から)

[団員：ソプラノ]

菅原文子(1971年入団) 川合満里子(1983年入団)

竹内匡枝(1985年入団) 荒井せつ子(1988年入団)

小口真知子(1992年入団) 柿沼徳子(1998年入団)

菅原昌子(2000年入団) 片岡京子(2001年入団)

田中弥生(2002年入団) 松原典子(2002年入団)

[団員：アルト]

高野京子(1962年入団) 箕浦邦子(1962年入団)

山下淑子(1963年入団) 中村美子(1985年入団)

三上裕子(1987年入団) 森永孝子(1988年入団)
小野久美(1993年入団) 佐野庄子(1993年入団)
中山ルミ子(1998年入団) 松沢 望(1999年入団)
平田輝子(2001年入団) 石塚みゆき(2002年入団)
牧 恵美子(2002年入団)

[団員：テノール]

大村健二(1970年入団) 島津欣矢(1997年入団)

深澤源裕(2000年入団)

[団員：バス]

加藤剛男(1962年入団) 山下広之(1962年入団)

松尾茂春(1977年入団) 森永毅彦(1980年入団)

室田 悟(1986年入団) 千葉光雄(1987年入団)

渡辺冬二(2000年入団) 片岡武彦(2001年入団)

創立40周年の感想をお寄せください

7月1日に出席される方のためにもと思って、この特集号を発行しましたが、じつはもうひとつの願いも込められています。

それは、この日の感想や、記念誌『40年の記録』の感想など、創立記念日をめぐってのご寄稿を、皆様からたくさんいただきたく、こちらから限定した方にご依頼するよりも、このように広く呼びかけてお願いしようと考えたからです。指名されないの遠慮したなどとお考えになりませんように。

・一応の締切りは、7月31日

・内容・枚数などすべて自由

よろしくおねがい申し上げます。

テキスト(旧約聖書の物語)から見たカンタータ 104 番

大村 恵美子

このカンタータは、当合唱団が創立以来何回も上演し、また「カンタータ50曲選」第3集の1曲として今年楽譜が出版されたのを機会に、来たる8月3日の野尻湖神山教会演奏会で演奏されることになっている。

冒頭合唱のテキストの出典

<第1曲合唱 訳詞>

牧人 主よ きげよ

ヨセフを 羊のごと 守る者よ

み光 放て 高きにあります者よ

<原詞>

Du Hirte Israel, höre,

der du Joseph hüttest wie der Schafe,

erscheine, der du sitztest über Cherubim.

<原詞出典>

「イスラエルを養う方

ヨセフを羊の群れのように導かれる方よ

御耳を傾けてください。

ケルビムの上に座し、顕現してください」

(詩編80:2、以下聖書からの引用は新共同訳による)

バッハの音楽からは、じつに広大でのびやかな、パストラル風な明かるさの極致として親しめるこのカンタータは、そのテキストを辿ってみると、意外にも、旧約聖書の始まりの章、すなわち人類の淵源の物語に深く根づいていて、創世記、出エジプト記の流れ全体を想起させ、そして古いイスラエルの民の心情を吐露する、代表的な2つの詩編(23篇および80篇)に養われたものだというのが、

わかってくる。

いま、冒頭合唱のテキストの中から、3つの固有名詞、すなわち、イスラエル、ヨセフ、ケルビムをあげることで、旧約聖書の世界の予備知識ふうな足がかりをつけ始めることにしよう。

ヨセフ

この「ヨセフ」は、皇帝ヨセフでも、イエスの父、大工ヨセフでもない。

まず、人類の始祖とされるアダムから、子孫がふえひろがり、時が流れた。いちど、人類の悪業をご破算にしてもらえるような大洪水があり、その試練から救われて生きのびたことで名高いノアにまで時代は下る。さらにノアの長子セムの子孫でアブラム(のちにアブラハムと改名)は、カナン人の地で、夢の中に神の言葉を聞く。

『あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、400年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。…ここに帰ってくるのは、4代目の者たちである。』(創世記 15:13/16)

また、「その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで…。』」(創世記 15:17)これが、現在の灼熱的中東情勢、すなわちイスラエル国家建設の大義名分となった「神からさずかった契約の地」信念の発端となる。

アブラムからイサク、その2人の息子のうち弟のヤコブ、このヤコブの12人の息子のひとりこそ、当の「ヨセフ」なのである。ヨセフは、父ヤコブの寵愛のゆえに、数奇な運命をたどり、イスラエル全体の歴史を広い次元にひろげることになる。

「兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。」(創世記 37:4)ヨセフは、兄たちに襲われて、エジプトに脱出し、そこで立身出世して宮廷の責任者となる。その後、カナンは地は大飢饉となり、父ヤコブほか多くのイスラエル人たちが、ヨセフをたよってエジプトに移住した。

ヨセフの兄弟たちは「ファラオに言った。『わたしどもはこの国に寄留させていただきたいと思って参りました。カナン地方は飢饉がひどく、しもべたちの羊を飼うための牧草がありません。しもべたちをゴシエンの地に住まわせてください。』」(創世記 47:4)

イスラエル人がエジプトに移住できることになった一要因として、なるほどと思われるのが、「羊飼いはすべて、エジプト人のいとうものであったのである。」(創世記 46:34)

詩編 80 篇の 3 節に出てくるエフライム、マナセ、ベニヤミンというのは、ヨセフの息子たちの名で、やがてイスラエル人たちが大挙して出エジプトを執行した際にも、12部族の中で、ともにモーセに協力した人たちである。出エジプト当時の兵役登録者(若者)が 603,550 人と記されていて、ヨセフの家族が飢饉をのがれてエジプトに移住して以来、その地にふえひろがったイスラエル人の人口の多さに、おどろかされる。

イスラエル

ヤコブの物語の中には、「ベヌエルでの格闘」の有名な個所がある。ヤコブは家族の一団と旅の途中、川を渡ったあとに、ひとり残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘し、ヤコブは激しく迫った。

『もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから』とその人は言ったが、ヤコブは答えた。『いいえ、祝福してくださるまでは離しません。』『お前の名は何というのか』とその人は尋ね、『ヤコブです』と答えると、その人は言った。『お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。』」(創世記 32:27/29)

この「イスラエル」とは、「神は支配したもう」という意味だが、この場合には、通俗語源的説明で、「神と争う者」という意味に解されるとのことである。

前述した大飢饉のとき、「エジプトへ行ったイスラエルの人々、すなわちヤコブとその子ら…」(創世記 46:8)と記されて、この頃になると、「イスラエル」というのは単にヤコブ個人の新名としてではなく、エジプトに対するに、ヤコブを中心として昔カナンの地に牧畜をして住んでいた人々、というような、人と土地とその生活とを包括する意味を含むようになり、ひいては、神に選ばれ、祝福された民とその国、ということになってきたようである。

カンタータ 104 番冒頭合唱の”Du Hirte Israel“ (汝イスラエルの牧者)とは、単にイスラエル=ヤコブという個人名ではなく、のちに生まれたような意味合いをもった、包括的な人・国をさす「イスラエル」だと考えられる。

ケルビム

出エジプトの途上、神がモーセに命じたという多くの指示の中に、ことこまかな幕屋設営に関する次のようなものがある。「幕屋を蔽う 10 枚の幕を織りなさい。亜麻のより糸、青、紫、緋色の糸を使って意匠家の描いたケルビムの模様を織り上げなさい。」(出エジプト記 26:1)「ケルビムの模様の垂れ幕を作り、金箔で蔽ったアカシヤ材の 4 本の柱の鉤に掛けなさい。」(同上 26:31/32)

出来あがった幕屋については、「雲は臨在の幕屋を蔽い、主の栄光が幕屋に満ちた。…雲が離れて昇らないときは、離れて昇る日まで、彼らは出発しなかった。旅路にあるときはいつも、昼は主の雲が幕屋の上であり、夜は雲の中に火が現れて、イスラエルの家のすべての人に見えたからである。」(同上 40:34/38)

神の臨在と栄光を示すのが「ケルビムの上に座する者よ」という表現となっているのである。

「ケルビム」が創世記に登場するのは、とても早く、アダムをエデンの園から追放したときに、神は、「命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた」(創世記 3:24)とあるのが最初である。

「多くは神殿の奉仕者としての天使のように考えられ、神の御座の運搬者あるいは契約の箱や神殿の宝物の守護者であった。したがって神の臨在を示す象徴的彫像とされ、翼をもつ人、牛、鷲等の形をもって表され、預言者の幻においては奇怪な生きものとして登場する」(教文館『キリスト教大事典』より)。

ヨセフ、イスラエル、ケルビムというわずか3つの名前の周辺に目をとめただけでも、私たちは、こうしてイスラエルの歴史に密着した世界に急速に接近できたような気がする。ただ単に、こざっぱりとした田園趣味などとはほど遠い、雄大な心象風景が、このカンタータの基礎となっている。

詩編 80 篇にたぎる諸々のねがい

冒頭合唱に、はじめの部分（新共同訳では第2節）が引用されているこの詩は、エジプトから脱出してイスラエルに帰還中の、民の心をうたったものようである。その全20節の中で、何と言っているかを、3つの面からまとめてみよう。

神に向かって何と呼びかけているか？

- ・イスラエルを養う方（牧人）
ヨセフを羊の群れのように導かれる方よ（2節）
- ・万軍の神、主よ（5、20節）
- ・万軍の神よ（8、15節）

何と質問しているか？

- ・いつまで怒りの煙を吐き続けられるのですか
(5節)
- ・なぜ、あなたはその石垣を破られたのですか
(13節)

何と懇願しているか？

- ・御耳を傾けてください
ケルビムの上に座し、顕現してください
エフライム、ベニヤミン、マナセの前に。
目覚めて 力を振るい
わたしたちを救うために来てください。
わたしたちを連れ帰り 御顔の光を輝かせ
わたしたちを お救いください。(2/4節、8節)
- ・立ち帰ってください。
天から目を注いで御覧ください。
このぶどうの木を顧みてください
(あなたが右の御手で植えられた株を
御自分のために強くされた子を。)
それを切り、火に焼く者らは
御前に咎めを受けて滅ぼされますように。
(15/17節)

- ・御手があなたの右に立つ人の上にある
御自分のために強められた
人の子の上にありますように。(18節)
- ・命を得させ、御名を呼ばせてください。
わたしたちを連れ帰り 御顔の光を輝かせ
わたしたちを お救いください。(19/20節)

この内容からは、バッハのカンタータ 104 番の雰囲気とはおよそかけ離れて、臨戦態勢で神の支配と救援を仰ぐ、イスラエルの民の切迫した気分が伝わって、現在のイスラエル政府の外交の、国家存続の危機に強く刺激され動かされた〈はりねずみ戦術〉が、ここに直結されている思いがする。

詩編 23 篇の心身にわたる慰め

それとは対照的に、バッハの基調はむしろ、最終コーラルのテキストである詩編 23 篇の、うるおいと恵みに満ちた、神の国の想念にあり、これこそが、冒頭合唱から全曲を貫いて流れるものとして、人々に心身にわたるやすらぎと喜びを伝えてくれるのである。

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ
憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。(詩編 23:1/3)

命のある限り
恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまるであろう。(同上 23:6)

<第6曲コーラル 訳詞>

主は わが たのめる
まことの 牧人
緑の 牧場に
羊を みちびき
みぎわに いこわせ
わがたまを 清む み恵みをもて

この詩は、キリスト教の病気見舞用カードにも最も多く用いられ、病人はこのことばに喘ぐようにとりすがり、安住の地を想い描いて、日々を耐えることができるようである。

冒頭合唱と最終コーラルの間の、テノール（第2曲 レチタティーヴォ / 第3曲 アリア）とバス（第4曲 レチタティーヴォ / 第5曲 アリア）独唱の部分は、この詩編の次のようなことばをよりどころとしている。

主は御名にふさわしく
わたしを正しい道に導かれる。
死の陰を行くときも
わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
(同上 23:3/4)

このコーラルが、ドイツ語の〈グローリア〉（詩・曲 Nikolaus Decius, "Allein Gott in der Höh sein Ehr€ß"）として礼拝中で歌われ重んじられ、バッハもカンタータ、オルガン曲で愛用していることは、私たちにとってもうれしいことである。わが国の1997年版『讃美歌21』にも、礼拝・グローリア「いと高き神に」(No.37)として、とり入れられている。

《了》